

北朝鮮のミサイル実験が止まらない。この夏、不気味な警報音も初体験した。

連日の報道もあり緊張も高まったが、そもそも発射実験であつて先制攻撃ではない。日本のメディアは、米朝首脳を好戦的な狂人のように扱うが、彼らは高度の外交交渉を行っているにすぎず、むしろ日本人の脆弱かつ曖昧な防衛意識の実態こそ、噴(は)つられて然るべきだろう。

政府は「内閣官房国民保護ポータルサイト」において、弾道ミサイル落下時の行動について国民に啓蒙している。しかし、国民保護法に基づく、武力攻撃事態に備えた重要なお知らせにもかかわらず、国民の多くはこのサイトを見たことがない。ミサイル着弾の可能性がある場合、Jアラートの起動により、警報サイレンや緊急速報メールが届くシステムだが、このサイトでは「極めて短時間で着弾する」と曖昧に言い放つ。

そして、初体験で学んだ時間は、わずか「4分」だった。

これまでで一番、国民が不安をおぼえる「発射」となったが、トラブルや失態続きのJアラートは何の役にも立たないことがよくわかった。

「あつ、もう通過したの?」「近所に地下なんてないよ」「ほんとに地面に伏せるの?」……ごもつともな異論反論が飛び交い、政府の啓蒙の曖昧さが際立つ形となった。わが国は、安全保障という、国家の最も優先すべき重要課題について、曖昧を是とし、その準備を怠ってきた。現行のミサイル迎撃

『最も強い言葉?で非難する』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

システムの実効性についても、科学的データではなく、まさに原発事故と同様、根拠のない安全願望に寄り添っている。そもそも、国家、国民の防衛に関わる大事を、内閣府や総務省(消防)のシステムで運用、啓蒙すること自体、「ミサイル」をなめている。なぜ、堂々と防衛省が指揮統括しないのか? 堂々と「空襲警報」と呼び、淡々と破壊、撃墜すればいいではないか?

Jアラートを起動するなら、ミサイルは破壊すべきだろう。

政府は、事あるたびに「最も強い言葉で非難する」ことを繰り返してきた。

「最も強い言葉?」が、Jアラート以上に何の効果もないことは言うまでもない。

必要なのは、Jアラート(防災)ではなく、迎撃(防衛)だ。

迎撃ミサイルで海に沈めるか、国民の祈りで神風を吹かせるか、いずれにしても、サイレンが鳴り始めて、個々人があたふたする問題ではない。

北の「悲願」は、中距離弾道ミサイルの実戦配備であり核兵器保有である。

そのための実験を完了するまでは絶対にあきらめることはない。

ミサイル着弾の可能性があるから、Jアラートは起動した。

最も強い言葉で、日本政府に抗議したい!

「主権国家ならば、ミサイルは破壊すべきだ!」



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中